瞳　子

常磐　誠

連載第三回「渋柿騒動」

その日。琥太の試合当日の朝。だというのに、あいつはケビンと共に私が夏休みの課外授業の為に家を出るのを見送りに来た。

「ここに泊まらせてもらうとこうして朝ゆっくりできるのが一番ありがたいよね」

そう言う琥太の表情から、私はいつもと違う雰囲気を感じることができなかった。いつも通りに琥太はケビンと一緒に私を見送る。にこにこと。へらへらと。

私は無言で、まともに琥太やケビンの顔を見たり、そして当然微笑んだりもしないで、憮然とした顔をしたまま家を出る。朝早い時間に学校へ向かうその足取りは、重い。それがそのまま、表情にも透けて出ていた。母も父も、そんな私のことを見ても何も言わない。父に至っては、見えない。行ってきます、のか細く消えそうな声に、行ってらっしゃい。その声もまた小さかった。それがまた私の気持ちを重たくさせる。じゃあ大きければ良かったのか、励まされたのか。そんな風に問われても困る。それは傍迷惑というものだから。

結局、それは思いやりのつもりなのだ。母の。そして父の。ありがたくもなんともない、思いやりなんだと思い、そしてそれが全くもって嬉しくなかった。もう一つおまけに、傍迷惑な挨拶をする琥太の存在が、ありがたくない。更に更におまけを追加しよう。筆談器を忘れてしまった。気付けばまたあの青々しい葉の生い茂る道。学校と家の中間地点辺りまで来て気付いてしまった。

取りに戻ろうと思えば戻れた。正直戻った方が良いとも思った。それは本当だ。でも、それで琥太に出会い、また微笑まれてしまうのが、何故だか無性に嫌だと思ってしまった。私は眩しい青の葉から目を逸らして立ち止まったまま三秒間考えて、良いや、メモ帳あるし。そう思って学校へと歩みを進めた。もう、青々とした葉っぱのことを気にかけることもない。下を向いたまま歩いていると、自ずからその眩しさに目を眩まされることもないのだから。

今日の授業は平和授業という名の特別授業だった。特別、とは言ってももう一世紀を余裕で過ぎた今、重要性を叫ぶ声も縁遠いものを感じてしまう訳だ。当然その重要性が理解できないという訳でもない。当事者が生きていない世の中になってしまったのだから。でも、結局当事者でないという現実は変わることはないのだ。しかも私は、そして校内の生

徒は、女ばっかりだ。この事実を前に、戦争という重みは私の中でひび割れてゆく。
「あーくっそだりー。あたしらもし今戦争起きても行かねーし」
「そもそも女に戦争とか関係ねーし」
という軽い発言を教師の前でするような連中を、
「そういうこと言わない。今年は新ネタなんだから我慢しろよ」
と教師がなだめる。教師が彼女たちに合わせているのか、それとも本心なのか。それはよくわからない。
若手で、どちらかと言えば見た目の良い部類と評されがちな男性教師。地歴の授業と、私たちの担任。授業がおもしろいとは思わない。わかりやすいかどうか。否だろう。そんな感じで大体評価は一致している。そんなもの。そんな人。
そんな訳で私はその発言を、本音に近い部類であると思ってしまっていた。何せ、新ネタ、ときたのだから。私の耳についた言葉。h1、ト音記号で唯一五線譜の上に乗るシの音に若さを感じると同時に、耳障りな不快さを感じずにいられなかった。
体育館で眺めるプロジェクターには、坊主頭の男子達が映し出されていた。彼らは今の私達と変わらない年頃で、国を守る、という大儀らしいことのために命を散らした。その犠牲がなければ今の日本はなかった。などというアナウンスは、まるでお涙頂戴を誘うように感じられて聞いているのが正直辛かった。そんな中で、
「――――！」
私は目を疑った。そこに映っている姿が、余りにも琥太に瓜二つ過ぎて、一瞬だけ、私は呼吸に苦しんだ。字幕テロップに映る名字は、木村。全くもって琥太と違う名字を見て、あぁ、バカらしい。そう思って、そして次の瞬間、その木村さんが乗った戦闘機の特攻シーンが流れたのを目にした私は、
「……」
言葉を失っていた。
戦争というものの重みはクラスメートと担任のせいで瓦解していたはずなのに、気付くと私は顔を伏せ、無事に帰れない私と同い年――だった――木村さんのことを思ってしまっていた。そう。死んだのは、帰ってこれなかったのは、木村さんであって、あいつではない。そんな単純なことが、わからなかった訳じゃない。だのに、私は軽い一言すらも、感想文に書けないで提出してしまっていた。
そしてお呼び出し、という予想通りのコースと相成って、職員室へ、という状況が今私の目の前に展開している。所詮他人事だ。戦争や特攻の話ではなくて、今この景色が、他人事だった。
職員室では担任が私の提出した白紙の感想文をデスクに置き、やや不機嫌そうな顔をし

て腕組みをしていた。私が眼前に立ったのに気づくと、一瞬だけそのしかめ面の緊張を「意識的に」解き、笑いかけるようにして、
「お。来たね」
なんて言う姿に、また苛ついてしまうのが私だ。筆談器は家に置いてきてしまった。ポケットに忍ばせてある手帳とペンを取り、
『大事な用事があるのですみませんが感想文は課題にさせてもらえませんか？』
と書き付けて担任に見せた。
「そう。それなんだけどね……」
と担任は白紙の紙、私が書くべき所が全く書かれていない不適切な部分をじっと見つめて、
「百合神はそういう風なことをする子じゃないって僕は思っていたから、ちょっと残念だなって」
そんな言葉を口にした。私は腕時計をちらり、と見る。時間がない、というのはあまり相応しい言葉ではない。実際、今出てしまえば大会が本格的に始まる前に国技館までたどり着けてしまう可能性だってある。だから、時間がない、というのはやっぱり相応しくないな、と思って、そして、
『そんなこと、ってどんなことですか？』
早く書いて、あまり綺麗でない字を見てまた苛々する。でも、職員室に長居したいとは思わない。ゆっくり丁寧に字を書くことも、正直億劫だった。
「だってあんなに真剣に見てたじゃないか。え？　そんなに見ていたのに感想文が書けないなんてあり得ないと思うんだよ。俺は」
担任の言葉は、私への信用とも感じられないことはないが、それも崩れてしまう訳で。もう色々なことが馬鹿馬鹿しくなる。
木村さんの映像が親戚に似ていて……などという真実を言える訳もない。私はだんまりを決め込んでいた。手話は通じない相手で、ペンを走らせることもできない。腕を持ち上げる力も沸かない。担任からの言葉は続く。
「何でも言ってくれて良いんだよ。遠慮しないで、書けなかったのにも理由があるんだろう？」
そうやって耳障りの良い言葉を、優しそうなトーンに乗せて語るのが、こいつの嫌らしいところだ、と私は思っている。信用ならない。もう時間の無駄だと思い、気怠い運動不足の腕をどうにかこうにか走らせる。
『すみません。もう良いですか？　今日は親や親族と約束があるので。もう時間がないんです。感想文は明日改めて提出しますので』

それだけスラスラ書いて、担任の目の前に提示する。
「いや待ってよ。そんな風に言われてもこっちだって納得できないし、普通に残って書いていけばいいじゃないか」
一挙に不機嫌そうな顔と声でまくしたてる担任を見ると、あぁ、ついに、というか、またも、の方が適切だろうか。馬脚をさらされている気分になってこちらが苛々する。こいつ、使えねぇって言われてるクチなんじゃないの、みたいな。そんなトゲのある言葉が喋れないから私からは出てこない。それで良いと言われる身にもなればいい。実にくだらない。実に面倒くさい身の上だ。
私はもうここに長居するのが面倒すぎて、さっきのメモの、『親や親戚と約束』の部分をペンで乱暴に叩き、ついでに白紙の感想文もかすめ取ってそのまま踵を返す。
「おいコラ待ておい！　全部お前が悪いんだろうが！　おい百合神！　待てよオイ！」
背中越しに聞こえる怒声か罵声か、その類は全シカトを決め込んで後ろ手にドアを閉める。失礼しましたの声も出ない出せない出来損ないの声帯を切って叩きつけたいような、そんな気持ちになる。さぞや役立たずの器官も、この時ばかりは大声で喚いてくれるだろうか。
馬鹿馬鹿しい思いを抱えて、未だに何か言っているっぽい使えない担任から逃げ去る私のことを、生理か、とかそんな風に揶揄してあいつらは笑うだろうか。下らない。あぁ、そこまで思ってようやく思い出しました。私って、ここには居場所ないんでしたっけ。そうでした。鞄を取りに教室へ戻り、そのままＪＲの駅へ歩き出す。今日は天気が良い。どんよりとした私の気持ちを、最高に見下してくれている。素晴らしいですね。そう思って、そのままの気分で、実際の空とはまるで反対の、暗雲立ちこめる心持ちの私がＪＲ総武線に乗り込んだのと同時にメール着信を知らせた携帯には、母から打たれた文章が連なっていた。
今日のこと、先生から電話で聞きましたよ。感想文は課題として、明日の早朝提出だそうです。
その内容に対して特に返信はしなかった。目的の駅まではたった二駅で、返す暇がなかった。……誰に対する嘘なのだろうかと、我ながら呆れかえる思いがした。
両国駅が何十年前からこういう姿形をしているのか、私はよく知らない。電車二つがすれ違えるだけの、最低限のスペースが確保された、一つの島だけが存在する駅舎。階段のどちらを降りるのかで降りた先の雰囲気がまるで違う、ということを私は写真でしか知らなかった。
その西側出口、国技館に近い方から出て行こうとすると歴代の横綱の中でも輝かしい経歴を持つらしい人が大きな、本当に大きくて立派な額縁に飾られ、奉られているのが目に

入った。本当にご立派なこと、とだけ私は思った。
それが琥太の祖父の写真であることは、両親や幼い日の琥太達に聞いて知っていたけれど、当時はともかく今の私からすれば、それを含めても、それだけしか感情は起こらなかった。力相撲の石像も、これの何が力相撲なのか、これっぽっちも意味が理解できなかった。
気持ちの晴れないまま歩いても三分でたどり着く国技館の出入り口近くでは沢山の高校生が、そこらで稽古をしていた。全国まで残っている連中だ。琥太より体が大きいかどうかは置いておいても、やはり体は屈強という言葉がお似合いの、ごつい連中ばかりだった。……あまりにも、私は場違いに思えて、本気で気持ち悪かった。琥太や彼らのことではない。私がいる場所としては、ここはあまりにも不似合いだと思ってしまわずにいられなかった。自分が消し飛びそうな気にまでなってくる。鬼気迫った彼らの雰囲気がそうさせるのか、午前中に見たあの映像が未だに影響を与えているとでもいうのだろうか。どうにも、気分が悪い。
そのまま帰ってしまおうか。踵を返したく思えたけれど、流石にそれではここまで来た意味がない。今までとは少しだけでも違う行動を取らないといけない、その思いと深呼吸だけで、私は会場へ、琥太達の戦いの場へと足を踏み入れた。
すると、どうだろうか。厳かな、静かな空気には、萎縮するような、恐怖するような感覚を覚える。自分には不釣り合いな、場違いな心地がそうさせるのか。私が看板の指示に従い歩みを進めていくと、わっ、と光に目を眩まされるような感覚に襲われる。そして次の瞬間には、わぁっ、という歓声が体にぶつかってくるように感じた。それが私が国技館の土俵を目にした時の、感覚だった。
偶然にも、丁度その時土俵の端で蹲踞の姿勢をとり、一礼して勝ち名乗りを受けていたのが琥太だった。土俵を降り、こちらに近づいてくる最中、琥太の通う高校の名がデザインされたジャージを着た、恐らく一年生であろう二人が、
「お疲れさまです！」「お疲れさまです！」
と我先に争うようにして琥太に歩み寄り声を上げタオルを差し出す。
「……」
琥太は無言のままタオルを受け取ると何かしらの指示を二人に出した。
「はい！」「はい！」
とまたも威勢の良い声を張り上げた二人は琥太に頭を下げて私がいる方向とは逆の方へと駆けて行ってしまった。そして琥太はそのまま私がいる方に歩き、そして、
「わー！　柚眞来てくれたねー！　本当に来てくれたー！」
とほぼ叫びながら突進してきた。瞬間周囲の人々が私たちの方を向く。私は羞恥と怒り

を感じ、そして筆談器を忘れてきたことを後悔しながら、顔面にボールペンが刺さるように持って待ちかまえた。
「危ない！　刺さる！」
琥太が気付き一歩手前で止まったところで私は更に前蹴りの要領で股間を狙う。
「怖い！　別の意味で刺さる！」
琥太が股を閉じようとしたところで私は足を止める。
『刺さっておけば良かったのに』
私が手話で話をすると、
「いやいや。危ないでしょ？　下手すると死んじゃうよ？」
びっくりした顔で抗議する琥太。手話が通じるということは、やっぱり色々とスピーディで捗るな、と感じながら、でもやっぱりそれを実感する相手がこいつだった、というのが癪だ。そう思って私は、
『死んでも全責任はこいつにありますって説明するわ。私』
そう言って最後に親指を地べたに力強く向けた。
「ヒドい……」
琥太が落ち込んだ顔をして呟いていると、
「オイ瀧中！」
というややドスの利いた、強く低い、それでいて女性的な雰囲気の声が聞こえた。それは明らかに琥太の後ろに立っている女性から聞こえた声で、そして私はその人が明らかに顧問であることを感じ取った。別段服装などからそれだとわかることはなかったが、何となく、感じられた。そしてそれは、
「式森と福田から報告受けた。というか見てたけどな。つか彼女か何かかな？　そこの子は。いちゃこらやる暇あったら自分で報告に来いよっていう話なんだが」
という説教じみた話からみて、間違いはないんだろう。そして、
『彼女じゃありません』
とだけ手話で返す。伝わらないに決まっているが。
「……まさか耳が？」
と私の手話を見た顧問が呟くと、琥太がくるっ、と私の方を見て、
「いや、耳は聞こえ……って、ごめん。今何言ったの？」
と驚いたような顔をして聞いてきた。私がいきなり手話を使ったことを少しだけ意外に思ったのかもしれない。確かに、手話が通じる相手なんて限られているのに、無遠慮に使うのも中々ない話ではあるだろう。そう思ったが、でもそれを素直に行動に表せるほど私も成熟なんてしてはいないのだ。

『別に。何も』
そう手話で呟いて、
「あ、そう……」
そんな何の掘り下げも起こらない返しを琥太がすると、
「しかしあの琥太が女を連れ込むなんてなぁ……」
と顧問がしみじみ呟いた。
「いやいや連れ込むなんてそんな……」
と琥太は少しだけ顔を赤らめるようにして手をぶんぶんと振りながら答えると、
「今日は赤飯かな〜」
と笑って言いながら私の方に向き直り、名前何て言うの？　と聞いてきた。ペンは手に持っていたがメモ帳は鞄の中だ。それを取りだそうとしていると、
「彼女は百合神柚眞さんです。僕のはとこです」
と琥太が代わりに答えてしまった。
「親戚かよ……いや、でもはとこは確か結こ……」
顧問が結婚、と口にしようとするのを、
「こら！」
と琥太が遮った。その後顧問から頬を伸ばされてしまって、いだだだだ。という琥太の呑気な声が耳に入った。
「えっと、柚眞さんだっけ？　こいつの頬マジでぐにぐにで気持ちいいからオススメだよ。ま、今日はゆっくり応援してってね。じゃ！」
そう言うと顧問は私も既に知ってはいる——実際にやりはしない——情報を口にして立ち去っていった。ご機嫌に鼻歌まで歌いながら。私が呆気に取られていると、
「うん。じゃあいつまでもここにいるのも何だし、うちらの控えスペースに行こっか」
という琥太の声かけを受け、先導されることになった。行く道すがら、どうしてあの顧問はあんなにご機嫌だったのかを訪ねたが、
「……気にしない方が良いことも、あると思うんだ」
というちょっとした呆れというか、ため息と乾いた笑いの混じった微妙な返答に、私はそれ以上のことを口にしなかった。しなくても、私もその言葉については同意する所だった。
私を先導する琥太はいつものようににこにこと笑っていた。笑っていたが、出会い頭はともかく、今の琥太はもう浮き足だった所もなく、大人し気、というか、いつも以上に鈍重な気配を感じさせた。動き自体はきびきびしている様子なのだけれども、昨日までの琥太とは何かが違う。そんな違和感のようなものを私は感じた。

そうこうしている内に土俵からやや離れた、琥太の高校名が張り紙されたスペース。そこには既に一人、中年の男性が腰掛けていて、近づく琥太に気付くと軽く手招きをしてきたのが私にも見えた。
「よぉ。やっぱ盤石なんじゃねえの。琥太……て、お、おい。お前……そこにいるのはまさか……お前！」
琥太とハイタッチを交わした直後に私に気付いたその男はいきなり狼狽し始め、仕舞いには叫ぶような声をしていた。
「……今日は、赤飯だなぁ……」
しみじみと、またもさっきの顧問と同じ言葉を口に出していた。相撲をしているというだけで女っ気がないのは十分に察することができるのだけれども、まさかここまでとは、という思いもして、私は面食らう様な感じを覚えた。
「いい加減にしてよね、あんちゃん。そういうんじゃないから」
さっきの顧問と比べると大分開けっぴろげに否定すると琥太は他の高校と比較しても狭いスペースの一角にドカリと座りペットボトルに口をつけた。
「いやいやー。女っ気ゼロのお前がいきなり国技館に女の子をってもう今から槍降って来るぜ。電車止まって俺帰れなくなっちまうぞどうすんだよ。オイ豪快になったもんだよなぁ～」
酒でも呑んでるのかと思えてくるような饒舌さであんちゃんと呼ばれた男はコップをくいっ、とあおりながら私を見ていた。
「ほら。柚眞。歩くセクハラじじいの近くに居ちゃダメ。こっちに来て座っててよ、ね」
琥太は手招きしながらこちらに私を呼ぶ。
「おいじじいとは何だじじいとは。俺お前とそんな違わねぇだろうがよ！」
と男が睨みつける。私はその言葉に少しだけ驚いていた。
「ほらそんな法螺吹くから柚眞が驚いてる。二十五弱も違ってたら大分違うでしょ。じじい」
『四十くらい？』
私がそう返事すると、
「ん？　あんた耳が悪いんか？」
と思い切り口にして尋ねてきた。私の耳が本当に悪かったらその質問も聞き取れやしないだろうにと思う反面、結構年がいった人を相手にするとこのパターンは意外と多い。四十程度と判明しておいて何なのだが、五十過ぎだと思った私は、どうしてもそういう基準で考えてしまった。
『耳は聞こえますがしゃべれません』

と、さっき琥太に先導されている間に出しておいたメモ紙に書き付けていた文を見せる。
「ほぉ」
とだけ答えたこの男は琥太の方を向いて、
「まぁ本当に耳が聞こえねえんだったらここから根ほり葉ほり聞いてやりてぇところなんだがよ。まぁようはあっちの方はどうなんだってところから手始めにッ！」
流石に琥太から軽く叩かれる。
「ごめんね。柚眞。この人デリカシーっていうものを遺伝子的に持ってないから」
「何言ってんだよ琥太ァ。俺はお前のアソコが小指の先サイズだった時から痛え！」
思い切り耳を引っ張る琥太に対して、
「なんだよなんだよ。お前今日は妙に暴力的じゃねぇかよ。俺はコーチ様だぞ？　わかってんのかよ。え、全くよぉ……」
いきなり自分の権威を傘に着始めるが、
「紹介遅れたね。この人一応コーチの斉藤大吉さん。あんちゃんって呼んでる。一応紹介するけどこちら百合神柚眞さん。言っとくけど一回会ったことあるからね。まさか忘れたとか言わないよねまぁ忘れてても良いけど忘れるような人だし柚眞は別にこの人と仲良くする必要ないからね」
と数段冷たい紹介に打ち消される。……というか私もこの人と会ったことがある記憶一切ないが。
「は？　いつだよ。てか一応ってなんだよ」
「六歳の時」
「随分まぁ昔の話……あぁ！」
それだけで思い出したのか大吉さんは手を打ち鳴らして納得した様子だった。
「百合神つったらアレだな。確か親方の……姉さん家の」
「そうそう」
「そこの娘さんかぁ。うわぁ……つかもうあれから十一年経ってんだし俺も気付くはずねぇよ。でかくなったなぁ。そうそう。ぜんっぜん口利かねぇ女の子だなとか思ってたんだよな～こりゃまたべっぴんになってまぁ。この男はやめとけよ？　俺の方がいいぜ！　俺にしちゃいなよ！」
最後の方はスルーするとして、私も何となく思い出してきた。そうだ。昔のあの秘祭の日。宮ノ訪神社の相撲大会の日にたくさん居た大人の中に、この人もいたのだろう。具体的に思い出せるはずもないが、向こうは記憶に残っていたらしい。私の特徴を思えば、それは致し方ないだろうが。
『そういえばケビンと貫太は？』

うるせえわこの妻子持ちが。と毒づいている琥太に私がメモ帳に書いた文字で尋ねると、
「あ、ケビンは次の取り組みだよ。だから土俵傍に……あ、そこ。そこにいるね。貫太だけど、元気と健太に捕まって向こうの控えスペースに拉致られてったよ。直に戻ってくるでしょ」
とのことだった。
「貫太ってあの中坊。知り合いか？」
と大吉さんが尋ねてくる。琥太ははぁ、と露骨に肩を落とす。私が手話で答える。
『弟です。お世話になっています』
手話が通じない大吉さんが琥太に目を向ける。
「百合神っていう名字の時点で気付こうよ。弟だよ。あと、弟がお世話になっています、だそうです」
その通訳を受け、
「うるせぇバカ。……ゲフン。丁寧にどうもです。かわいい弟さんをお持ちで」
「絶対思ってない」
「うるせぇバカデブハゲ。……おほん。いやぁ彼にこんな美人なお姉さんがいるなんて。今日からもっと優しく接しますね」
「ハゲって……」
程度から言えばどんぐりの……という言葉がお似合いな陳腐極まりないやり取りを繰り返す九分狩り坊主の琥太とあんさんは土俵の方に目を向ける。タイミング的には、呼び出しを受けたケビンが丁度相手と立ち会いをしているところだった。
その取り組みは一瞬にして終わる。体を右に左にと引っ張り回し最後は横を向いた相手を押し出して、ケビンは勝利を収めた。
「お。マジで柚眞来てんじゃん。正直来ないと思ってたわ俺」
控えスペースで意外そうな顔をしてケビンが言うのを聞いて琥太が、
「ね～。来てくれて良かったなぁ。ゆっくりしてってね」
と呑気に、へらへらとして言うものだから、
『ここはお前の部屋か』
と一喝してみたりもしていた。えへへ。と笑う琥太には、緊張感が感じられなかった。拍子抜けするような心地がして、私は裏切られたような気持ちになっていた。私は心のどこかで、早く二人が負けてしまって、さくっと帰れたら楽なのに。そう思っていた。
――ただ今より、四回戦を始めます――
そんなウグイス嬢のアナウンスを横目ならぬ横耳という感じで聞き流していた。でも、
「……」

琥太は、違っていた。すっく、と速度もなく立ち上がると目を閉じ、私の横を無言で通り過ぎて階段を一段下り、そこでじっ、と佇む。
大きい図体だけでも目に障る時があるというのに、まさかのお尻が目の前にでん、と存在する状態になり、私は流石に邪魔だと思い琥太をどかそうとした。しかし、
「おっと。今はやめとけ」
と肩をあんさんに軽く叩かれて制された。何事かわからないで琥太を見直していると、私はぎょっとした。琥太は、いつもと変わらない。服を着ていないということはあるけれど、だからこそ伝わる事柄があった。服ではなく、体自体が大きいこと。いつもは、丸まるとした雰囲気の、見た目通りの背中が、今は違うのだ。今日、国技館で初めて見たまわし姿は、変わることなんてあり得ないはずなのに、今の琥太は明確に違う。でも、何が違うのかをうまく言葉にして捉えることができず、私は気持ち悪さまで覚え、鞄の中から取り出そうとしていたペットボトルを取り落としてしまった。そのペットボトルは琥太の足下へ転がり、止まる。これ幸い、と私は思った。でも、
「……」
琥太は微動だにしない。まるで足下の物には歯牙にもかけず。という言い方がピタリと当てはまるような、恐怖が背中越しに伝わってくる。
ペットボトルを拾いに行くこともできず、そして琥太に拾わせることもできない。沈黙が流れていると、不意に口を開いた。
「柚眞。ごめんけど僕は拾えない。拾いに来るのは大丈夫だよ」
琥太、だった。そう言うとそのままあいつは無言で数段階段をまた降りる。
「……」
私が何も言えないままペットボトルを拾うと、それに目をくれることもなく、
「じゃあ、行ってきます」
そう言って土俵へと向かっていった。おう、行ってらっしゃい。あんさんだけが、呟いた。
私は、この雰囲気を、空気を、知っている。そう思った。正しくは、思い出した。
思い出した場面は、二つ。一つ目は、父の剣道の仕合だ。父は名前が呼ばれる頃になると、こんな風に集中を高めだす。私や貫太が幼くて、喧しくとも、母はたしなめたり、または怒ったりするものの、父は何も言わなかった。何も言う必要がなかったのかも知れない。琥太は私が転がしたペットボトルが見えていたが、父には見えなかっただろうし、元々の雰囲気からして、だ。私たち姉弟がいてもいなくても、関係なく集中していた。そして時間が来ると、行ってくるよ、とだけ言い残して静かに立ち去っていく。父の仕合前の、いつもの風景。決まりきったやり口。そう、それは最早所作と言い換えても良いくらいの

光景。貫太は呑気にがんばってー！　何て叫んだりして。私は父の応援用のおもちゃの太鼓を鳴らしたりして。そして母は、行ってらっしゃい。そう呟くと、後はもう父の応援をしなかった。仕合を見ることさえしなかった。理由を尋ねても、お父さんのことを信じているからですよ。と毎回答えるが、私はそれが嘘だと思えてならない。かと言いつつ、本当が何なのかも、見当すらつかない。

二つ目。昔の、話。曾祖父が死んで、その葬式で、曾祖父が骨になる、というその時の琥太の目。そして琥太の周囲に漂っていた空気。私が忘れたい。早く忘れたいと思っていたはずのあの空気。それが背中越しにさっき伝わったのを、私は思い出した。

「泣くもんか。……泣くもんか」

そう呟いていて、それでいて涙を目に一杯に溜めていたような、そんな一人の男子に過ぎない光景に、あの日誰しもがその異常さに気付いていた。二十歳になる前に横綱になった琥太の祖父も、私の祖母も、人付き合いが嫌いであまり人前に顔を頻繁には出さない祖父も、赤の他人同然で、私との繋がりが全くわからないような遠い親戚も、そして目が見えないはずの父も、まだ幼かった弟さえも。

あの時の琥太の異常さに気付いていた。

「こたにぃ、こわいよ」

と貫太が父に泣きつくと、その頭をなでてあげながら、大丈夫だよ。そう言っていた。その顔は笑っていた。貫太を安心させる、優しい笑み、では断じてなかった。

「そう、か……やっぱり……そう、なんだね」

小声で呟く声は、私の耳には間違いなく届いていて、そして覚えている。まるで探し求めていた仇に出会えたかのような、おぞましくさえある笑い顔で、私は父も怖かった。怖くて目を逸らした先にいた琥太の祖父の顔まで、父と同じ顔で笑っているのを見てしまった私は、

「あら、珍しいこともあるもんだ」

祖母の和服の袖にしがみついてしまっていた。無言で、何も言えず、ただしがみついていた。

あの、異様なまでの場の空気、オーラ、とでも言うようなものが本当にあるのか、私は中学、高校と進学していく中で、常々ある訳無いと否定し続けていた。でも、それは多分、忘れていた。それだけだったのだろう。

琥太は、一瞬で勝ってしまった。私はその一番を、全く見ていなかった。相手が、琥太よりも二周りくらい大きいのを見て、勝てるんだろうか、と思ったら、相撲を取らずに相手が土俵を降りていって。不戦勝だろうか。そんな風に思ってしまうくらいには、一瞬だった。

一体、何だというのだろう。戻ってきた琥太からは、もうさっきまでの、何かに取り憑かれたかのような恐怖感を感じることもない。にこにこと。へらへらと。
「勝ったよ。柚眞」
そんな報告を受けても。何の実感も湧かない。生きた心地がしない？　少し違う気がして、でも、このフワフワとした心地の悪さは、私の心を支配して離さなかった。
一体、何だというのだろう。たった一瞬。長くて十秒程度で相撲は終わると聞く。その一瞬の為だけに、あんなにまで琥太はなれるというのか。一体、何なんだ。そう思っていると琥太は席を立つ。
「どこ行くんだ？」
というあんさんの問いかけに、
「厠だよ厠。先生への報告ついでに、ね」
琥太はゆっくりとまた階段を降りていく。
「あんた。さっきの琥太の相撲、見てなかったろ？」
というあんさんの問いかけに、私は無言で頷く。
「今まで琥太の相撲見たこと無いのか？　親戚なのに」
その問いかけにも頷くと、あんさんは頭を掻きながら、
「まぁ、初めてあんなんやられたら、怖くもなるわなぁ。うんうん」
そんな風に勝手に納得していた。でも、その意味するところは、十分わかる。
「眞琥さんが死んでから、かな」
あんさんが、語り出す。あんさんも親方――琥太の祖父――と親交があり、曾祖父の葬式に出席していた。つまり、私が思い出してしまったあの光景を見ていた。親方や私の父がおぞましく笑っていたことも、私以上に覚えていた。
「眞琥さんの目はやべぇ。あの目に睨まれたらもう。ションベンちびるとかそんなチャチなレベルじゃねぇもんな」
やや下品な本音ではあったが、確かに、曾祖父の一喝は、本当に凄まじかったと聞く。誰もが曾祖父のことを慕っていた、というより、畏怖するような部分もあったという。とてつもないリーダーシップも然ることながら、人の心を見透かすような、いつの間にか心を掴まれて、惹かれてしまうような。そんな不思議としか言いようのない力を、曾祖父は持っていた。
「でも親方はそれを持っていない。んで、親方は三つ子の一番下だったな。他の二人も、持ってない」
『その内の一人が私の祖母です』
「あぁ、そうだったな」

私のメモに目をやって、思い出したように相槌を打つ。
「血筋っつうか、まぁ遺伝はやっぱしないんだなぁ、って親方は頻りに言うんだけどさ。遺伝してたんだよな。ほら、あのおっかない盲目の……」
そこまで言ってから、あ、しまった。という顔をする。
『父はそんなにおっかないですか？』
苦笑しながらメモを見せると、あー、オホン、というわざとらしい咳払いをしてから、
「今のは聞かなかったことにしといてくれな。だってあのひ、……柚眞さんのお父様は目がお見えにならないというのに人の心を見透かすようなことを仰られますもんね」
『わざとらしいですね』というメモを見せながら、私も同じことを思っていた。なるほど。父のそういう態度というか、雰囲気は曾祖父譲りのものだった、という訳か。でも、そこが琥太とどう繋がるのだろうか。父の子供は、私と、貫太だ。
「ほっといてください。んで、琥太があの日見せたあの目なんだけどな……」
あんさんが言葉を続けようとした時に、
「あの日っていつの話ー？」
と琥太が戻ってきた。間が悪い奴だ。構わず話を続けたい、と思ったが、あんさんに私のアイコンタクトは通じず、
「さぁて、何のことでしょうなー？」
と言葉を濁してうやむやにしてしまった。そして、また次の取り組みを告げるアナウンス。するとまた、
「じゃあ、ごめんね」
と言って琥太はまた私の居るところから一段下がった所に仁王立ちをして息を整える。背中越しに伝わる感じが、また、あの日のように、私を取り囲んでいって、
「行ってきます」
その一言が発せられて、また私は返事ができなかった。
一時の為だけの準備が、これほどなのだと思い知ると私は、それだけでどっと疲れるものを感じた。次の仕合は流石に見逃すことはない。琥太は三年生を相手に、またも一蹴する形で勝ちを決めた。その後の所作にも乱れはない。名を呼ばれ、勝ち名乗りの後の手の動きも、どうやら他の人よりもしっかりと時間をかけて行われているらしいことに私も気付くようになっていた。
顧問への報告、付け人と言うらしい一年生への指示、それらをてきぱきとこなしながら自分の行動を淀みなく行っている琥太を見てあんさんが、
「琥太の強さは基礎の強さよ」
そう呟いていた。私が振り向くと、そこにはいつの間にやってきていたのだろうか。貫

太の姿まであった。
「一応琥太も必殺技持ってるんだよ。必殺技っていうか、得意技」
「あ。俺知ってる。櫓投げでしょ櫓投げ」
「……」
私が無言で貫太を睨みつけると、
「ていうかマジに姉ちゃんが来るとか思わなかった」
「めっちゃお前姉ちゃんに睨まれてんじゃん、怖え怖え。俺までとばっちりとかマジ勘弁してくれよ〜。がっはっは」
「あっはっは！」
二人して何がおかしいのか大笑いを始めるので私はそれを無視してまた土俵の方を向く。
「まぁ冗談は置いといて、だ。柚眞さんや。その得意技を一切使わずここまで来てるのは、それも自分より大きい連中をばったばったなぎ倒しているのも、やっぱり琥太が強いことの証だよなぁとおいたん思うわけですわ。ねぇ、貫太」
「いや、ねぇ、とかマジでキモい」
「んだとコラァ。人が折角優しく話しかけてやってんのによお！」
「あ！　やめて！　暴力反対！　姉ちゃん助けて！　マジで暴力反対ー！」
何をしているというのか。くだらない連中を差し置いて、取り組みは進んでいく。
伝家の宝刀――らしい。詳細は知らない――の櫓投げという技を使わずとも、琥太は勝ち進む。ケビンもケビンで、得意技である掛け投げを駆使して勝ち進んでいく。
元気と、そして健太。今は琥太とケビンしか来ないが、かつては私たちの家に一緒に来ていた幼なじみも勝ち残っていく。気付けば、幼なじみ四人がそのままベスト四に残っての準決勝になりそうな様子だった。
「やっぱ強えな。この四人はダントツだ」
とあんさんが言うと、
「中学、高校って今までずっと四人がベスト四だったんだよね。あんさん」
と貫太が尋ねる。その問いに首を縦に振り、
「何てったってあいつらが幼稚園の頃から教えてたんだからな。あいつらは俺が育てたようなもんだぜ。こうなるのも当然、当然！」
と得意満面で答えるのを、どこまで本気にすれば良いのかはわかりかねたが、毎年ダントツと言われ続ける四人のことは、やっぱりすごいと思えたし、驚いた。
結局、元気が対戦相手を土俵下まで乱暴に突き落とした――相手も相手でまたごつい人だったのでそうならざるを得なかった部分もあるだろうが――相撲を最後にベスト四が出揃い、そこで小休憩に入る旨のアナウンスが鳴った。

「さぁて。便所行ってくっか」
　というあんさんに、
「あ、待って俺も行く」
　貫太もついて行ってしまう。スペースにいるのは、私とケビンの二人だけ。琥太はどこに行ったのだろう。というかそもそも、今更ではあるが琥太とケビン以外の生徒はどうしてこのスペースに立ち寄らないのだろう。そう思ってケビンに話しかけると、
「あぁ。俺らは二人しかここまで残ってない弱小校だしな。だからスペースは手狭だしオニ崎センセも大会執行の手伝いであんま部員に付けないし、あとは俺らの付き人やってる一年が二人ずつで計四人いるけどそいつらもここには座れないっていうルールがあるんだよ。ちなみに琥太は便所に行ってるだけだから話あるんなら行ったらいいさ。降りて左。すぐわかるから」
　と集中のために使っていたのであろうヘッドホンを外し、答えてくれた。
　オニ崎センセ、正しくは寄崎(キサキ)千鶴子先生らしいが、き、という音を鬼と宛ててオニ崎と陰で呼んでいるらしい。顧問の先生も、弱小校で、なおかつ女性では男ばかりの生徒、教師陣とのやり取りにも何かと気を使うことが多く不便や苦労も多いらしい。私は一先ずケビンに感謝を伝え、ケビンがヘッドホンをまた装着したのを見てから、階段を降りていった。
　準決勝まであと十分もないくらいだろうか。トイレへと向かう直線は、相撲のテレビ中継で見かけるような、花道の先だった。
　花道、といってもごった返す人の波のせいで花なんていう言葉通りの印象などまるでない、そんな道を歩いていくと、丁度男子トイレのドアを開け、出てきた琥太に出会うことができた。
「あら、ナイスタイミング」
　そう言うと琥太は私の横まで歩いてきた。いつものノリでトコトコと走り来るような感じではなく、落ち着いた感じで、ゆったりと、悠然とした感じで歩いてきた。
「柚眞もお手洗い？」
　そう尋ねられて、首を横に振って返す。そっか。琥太が言葉だけ返して戻っていく。その腕を掴んで、琥太が顔をこちらに向ける。服を着ていない琥太から、少しだけ油っぽいにおいが鼻についた。
『普通にケビンのとこまで戻るの？』
　という問いかけに琥太は、
「いや。下手すると決勝で当たる相手だし、今はあんまり顔を合わせたくないから別のとこに行くよ。……一緒に来る？」

まさか一緒に付いて行きたい、などと私が言うはずがないだろう。琥太の笑みにはそんな雰囲気が感じられた。だから、私が無言のまま――手話による返事もせずに、という意味で――首を縦に振ったのを琥太は、
「うん。だよね。……うん？」
と二度見までして驚いていた。その様はあまりに予想通り過ぎて、
「痛い。だって驚いちゃって……。だってまさか僕と一緒に行くなんて言うと思わなかったから……痛い痛い」
筆談器がない分、紅葉の跡を残してやろうとしてしまうのだった。

国技館の二階に上がるのは初めてのことで、なるほどこういう感じになっていたのか、などと私は妙な感心をしてしまっていた。階段を上りきった先には屋上スペースもあったが、
「教員たちの喫煙スペースってことでね」
選手達は立ち入り禁止だった。まぁ、入れた所で煙たくてかなわない。まっぴらごめんだ。そのまま角を曲がり行くと、一息つけそうなベンチがあって、何故かそこには誰もおらず、ゆったりとした時間が流れているかのようだった。
「最初は選手とか色々いたけどさ、流石に勝ち残ってないからね」
琥太が先にボスンと音を立てて座り、横をぽんぽん叩いて私に座れと促す。やっぱりそう。にこにこと。へらへらと。私は琥太が叩いたスペースより遠いところに腰を下ろす。
「えー。遠くなーい？」
と琥太は困惑か抗議かわからない声を上げるが、
『別にこれでも会話には困らない』
と私は一蹴した。ここまで来る間にも、琥太と一緒に歩くところを見られては、ひそひそ話をされていたのだ。
「彼女連れかよ」
という小声がわざとらしく私に聞こえるように放たれていたことも、こいつはまるで気付いていないかのようなのだ。勘違いされては、困る。
「そっかー。あ、僕今少し汗くさいしね。しょうがないね」
という私が気にしていたところとは趣の違う所に琥太は着地点を見出していた。
『まさか本当にここまでアンタが強いとは思ってなかった』
話は私から切り出した。そうでしょー？　と琥太からは大したことない、という風な感じで帰ってきた。
『もっと序盤でスパッとあっさり負けるもんだと思ってた』

弱いと思われるのは結構男は嫌なもんではないのだろうか。貫太然り、武道をやっている男はそうだと思っていたのに、
「そうだよねー。僕は強そうには見えないもんねー」
なんて、呑気に笑って琥太は答える。にこにことへらへらが、いつだってくっついた顔をしている。
『ねぇ。アンタって曾じいちゃんが死んでからやっぱ何か変わったんでしょ』
そう聞くと、拘るねぇ。と苦笑される。別に何も変わりはしないさ。人の本質は変わらない、よ。琥太はおもむろに立ち上がると右足を高く上げ、右手で抱えると、
「Y字開脚！」
と一発芸を唐突に披露してきた。
『それがお前の本質だっていうなら思いっきりバカにしてやる』
冷めた目でそう返すと、
「すべったか。ちぇ。……でも昔から柚眞は優しいね。バカにしてやるって言ってくれるだけでも、大分優しいと思う」
琥太は、恐らく一発芸と言うよりもストレッチだったのだろう。逆の手足でも同じY字開脚をすると、手持ち無沙汰に、またベンチに座り直した。
「強い方が勝つ、のか。勝った方が強い、のか」
琥太がぽつり、呟いた。聞いた瞬間は、意味が分からなかった。
「柚眞は、どっちだと思う？」

二つの言葉が頭の中で、ただリフレインしていた。
私は答えられなかった。琥太は私が何を聞かれたのかわからないと思ったのだろう。
「ほら、強い方が勝つのか、勝った方が強いのかって。どっちだと思う？」
質問を繰り返した。でも、私には答えられる気がしなかった。当然だと思った。だって私はそういう舞台で生きている訳ではないのだから。
そして同時に思った。どうして答えられないのか、と。私は、私も、勝負の世界で戦っていたのではないのか！
なのに何故。そう私が思っていると、
「ひいじいじはね、明らかに勝った方が強い、の人だった」
琥太は昔を思い出すような面もちで、少しだけ上を向いて語り始めた。
「ひいじいじは、テニスで勝つために何だってしてた」
瀧中眞琥、死んで五年強経つ今でも空前絶後の最強テニスプレーヤーと名高い人。私から見れば、パワーバカというか何というか、琥太以上の大きさ、ごつさを持っていて、ジ

ジバカと言われるくらい私たちのことを可愛がってくれて、でも、やっぱり怖かった人。今、琥太が話しているのは、きっと私が知らない曾祖父のこと。

「単純なパワーだけじゃない。あの人は何だってできた。ドロップ、ロブ、そんな小技から、心理学まで駆使してとにかく相手に恐怖を植え付けて、何もできなくさせる。自分よりも強い相手を倒すために、できることは何だってしてた。ってさ。言ってたよ」

『自分よりも強い相手……』

「そう。その筆頭はやっぱり悠樹さんだったそうだけど、そういう人を相手にしていると本当に怖かった、って言ってた」

『怖い？』

「そう。怖い」

琥太が呟いて、今度は下を向く。

「親方も小さい時から聞いてた話だったそうだけど、中学を卒業して入門して、周りが高校を卒業する頃には三役になろうとしていて……っていう時になってもひいじいじの言葉が本当の意味でわかることはなくて。どうしようもなかった、って言ってたな」

そう言うとまた琥太は私の方を向く。私は三役の意味がわからなかったのでそれを尋ねる。すると琥太は申し訳なさそうに笑って、

「あぁ……えへへ。ごめんごめん。小結とか関脇、だから番付的にはナンバー三とか四くらい。テレビだと五時半くらいに出てくるくらいの方達……って言えばわかるかな？」

何となくわかったが、それがどれだけ強い人たちなのかはわからない。でも、重要なのはそこではない。私は琥太が続きを話すのを待った。

「だから親方は、そりゃあもう必死に、ひたっすらにがむしゃらに相撲を取ってたらしい。強い方が勝つのか、勝った方が強いのか。そもそも、強いって、何だ？　って。ない頭を使おうにも使えないで、延々土俵で暴れ回って。……相当、苦労したって言ってた」

琥太の言葉に、私はただただ黙って聞いているだけだった。別に退屈だと思っていた訳じゃない。私の知らない曾祖父と、その息子の歩んできた道程には確かに惹かれるものがある。

何せ分野は違うがどちらも空前絶後と言われる程の大スターなのだから。

「それでも親方が自分なりに答えを見つけだしたのは成人した後。つまり横綱になって一年経つくらいになってからだってさ」

『そう、だったんだ』

祖父がテレビに映っていると祖母や両親からよく親方の話は耳に入れられた。勉強に関しては相当出来が悪く素行についても喧嘩っ早さが祟りよく曾祖父が学校等に呼び出されていたとか何とか。そんな人だったから、だろう。答えが見つかるまでに延々と時間が過

ぎてしまったのも、頷けるように思った。
『けど、おばあちゃんが言うには、横綱になってからあの人、曾じいちゃんとは全く違う威厳を持つようになった、って』
「うん。だって親方が見つけた答えは、ひいじいじとは全く違う答えだったから」
琥太は私の言葉に頷くとそれだけを言って、立ち上がる。
「親方は今でもひいじいじの言っていることはわからないんだよ。だから、違う所に行き着いた」
そろそろ、時間だろうか。時計をみる。
「でもね、僕はわかるんだよ」
琥太を見る、そこで私の気持ちが、思考が、……頭の回転が止まる。僕は、わかる。それがひいじいじ、曾祖父のことだということも、すぐにわかる。でも、それ以上に、琥太の目が、訴える。また、あの時の目。人間ではない、いや、そんな訳がないけれど、ないはず、なのに。
「僕はひいじいじの言う強さもわかるし、親方の言う強さだってわかる。小さい頃から聞かされてきたから。教えられたから。だからわかる。結局は、強い方が勝つことも、勝った方が強いってことも、どちらも同じで、どちらも怖い、ってこと」
背中を向け、大きく伸びをする。何かの強い束縛から解放されたような感覚で、私は逆に体が弛緩し、大きく息をついてしまっていた。そのまま振り返る琥太の目は、いつもの目に戻っていて、安心するのと同時に、不安になった。あの目は、いつだって私の記憶の中、奇妙で、怖ろしい場面の中に、付いてくる。その目ではない目で、いつもの琥太が続けて呟いた。
「そして、逃げないってこと」
『逃げないって、どこから』
私が聞くと琥太は私の傍に戻ってきて手を差し出す。戻ろうか、そろそろだし。琥太がそう言って、私はその手を、取らなかった。
「僕は昴まで含めた四人だけじゃなくて、今まで戦ってきた全ての相手が、年上、年下、体の大小を問わず、怖かったよ。その恐怖は、いつだって付いて回るんだよ」
琥太は私が無視した手を自然に戻してまた歩き出す。そして思い出したように言葉を続ける。
「あぁそうそう。……ひいじいじが逝ってしまう直前、僕に話をしたんだ。お前は僕を受け継ぐ器だ。その極致に辿り着け。ってね」
階段を下りながら、人がまばらになった国技館の中を歩く。
『極致、なんて難しい言葉を十歳に向けるなんてね』

と私が言うと、あははっ。と琥太は笑って、
「話し終わった後すぐにお袋の電子辞書借りて意味を調べたよ。ひいじいじらしい最後のお言葉だった」
『結局それってどういう意味なの？』
単純にその答えが知りたくて私は尋ねたが、
「さぁ。それは結局どこなんだろうかねぇ。……わかんないや。えへへ」
と、笑ってごまかすようなことを言うのだから、世話がない。
でも、琥太がわからないのは、当然のことで、親方が横綱になって一年経つまでわからなかったことが、頭の良い琥太は伝聞でも理解できただけであって、でも実際に行き着いた訳でもなんでもない。むしろ、それが正解だったと私が気付くのには、少しだけ時間がかかった。
ただとにかくここまで来てしまったのだ。琥太の両親は琥太に相撲をさせるのを反対している親だ。そんな親の元でも、Ｖ十一。小学一年から続く十一年連続全国制覇まで、後もう二勝。そこまで来た。
――準決勝を始めます。アナウンスの声が耳を打つ。琥太が無言で私を置いて歩き出す。私は、花道の手すりを手に持っていたペンで打つ。その音に振り返った琥太に、伝える。
『優勝、してよ』
それは、呟くような手話で、余りに弱々しいと自分でも思えた。伝えられた琥太は、一度目を瞑ると、あの目を見せる。父を思い出す、記憶にはもう残っていないけれど、曾祖父もきっとしたであろうあの目で、顔は笑っていた。獰猛とも言える顔は本当に凄まじい気概を放っていて、
「……僕は負けない、よ」
それだけの言葉にも、私は気圧されてしまう始末で、行ってらっしゃい。いつも気丈に、それだけを告げる母のように、私はなれなかった。
準決勝はケビン対元気の取組が先に行われる。二人が土俵に上り、周囲が静寂に包まれる。そのまま蹲踞の姿勢、そして仕切りに入る。
「見た目は外人同士。高校にもグローバル何チャラの波が～って奴かねぇ」
あんさんがわざとらしくぼやく言葉に貫太がちょっとした相槌を返す。実際に一人は本物の外人であるが。
元気の父親はブラジル人で、見た目的には確かにそう。外国人に見えなくもない。肌は赤黒く髪も琥太と同じく九分刈りの坊主だから目立たないものの癖のあるやや明るめの色をしている。体格もまたゴツい。百九十にもなる身長と、幼なじみ五人の中では一番体重も重い。数段高く、離れた場所にいる私から見ても威圧感のあるその風貌に、私も今度ば

かりは怖いと思った。
はっきよい！
審判の両腕が力強く引かれるのと同時に二人はぶつかり合う。ガチン、という音の後ケビンの淡い金髪が上に浮き上がる。そしてそのままケビンは土俵の下に突き落とされ、転げ落ちてしまった。勝負あり！　の一声のすぐ後、元気の勝ち名乗りと、押し出しでの勝利を告げるアナウンス。それを聞いてケビンはこちらに戻ってくることなく花道を歩いて私たちの視野から消えた。
「うん～。惜しかったなぁありゃあ」
あんさんの唸り声とつぶやきに、
「えー。瞬殺だったじゃんあれー」
という貫太の返事。それはもっともだと思ったが、
「いんや。当たった後にケビンも引かずに堪えて器用に足を絡めてたんだよ。あれ巧く引っかかれば切り返しでばっさり切り捨てられたかもしれんのになぁ。元気の反応が滅茶苦茶良かった。そのまま力任せに一気に決めきったんだよなぁ。いやいや。あれは下手すると決まってた可能性もあるからなぁ……惜しかった。ギリギリの攻防だったよなぁ」
いたく感動した様子で解説を述べるあんさんを後目に、ケビンはどこに行ったのかを手話で尋ねる。
「あぁケビン兄ちゃんはトイレだよ。負けたら絶対トイレに駆け込んで泣くんだよね。あんさん」
貫太はそうあんさんに尋ねる。空気読みのケビンは泣くことさえも、そうやって人目をはばかってやるんだな、と私は思った。
そうこうしている内に今度は琥太と健太の二人が土俵に上がる。元気側は非常に広いスペースを陣取っている。団体では既に全国一を決めていて、個人戦でもかなりの選手が全国まで残っていた訳で、そして決勝進出を決めた元気に続けとばかりに健太の応援に熱が入っている。
琥太の様子を見ると、いつも通り、だ。その様子、動きは自然で、今までの取組と何ら差が見られなかった。
「あ、柚眞ちゃん。これは別に緊張して見る必要ねぇよ。どうせ健太じゃ琥太には勝てねぇからさ」
あんさんは冷たくそう言うと、琥太達の高校の名前が入ったクリアファイルでぱたぱた扇ぎ始める余裕を見せつけていた。私がその意を汲めないでいると、
「健太の野郎ムキムキだから勘違いされっけどな、あんなんじゃ琥太のぶちかまし止められんだろっていうな。運動神経だの小手先の技だのでここまで残ってるけど、言ってもう

五人の中じゃ最弱じゃ最弱！」
辛辣なコメントに多少面食らっていると、また更にコメントが続く。そして審判の両腕が引かれる。
「そもそもあのガキャア」
ここで二人がぶつかり合う。
「中学で突然モテたいとかホザきやがってよ」
琥太が健太を追いつめる。
「ダイエットとかしやがって。お陰で体ができやしねぇ」
健太が必死に堪えている。
「センスだけで相撲やってるのが丸わかり過ぎて動き読まれ――」
健太が琥太を強引に投げにかかり、それがすっぽ抜けた。
「たら即死亡。クソだなありゃあ。育成失敗って奴かね親方も」
がら空きの背中をどん、と一突き。琥太は難なく勝利を手にした。が、
「弟子じゃねえからって甘いんだよなったく。俺だったらあいつをあんなんにはぜってぇしねえ」
あんさんのグチグチした辛辣コメントは終わらない。
「そもそも健太のクソガキャアあんなブッサイクな猿面でどうモテるんだったく。身の程を知れってんだ身の程を！　クソ！　クソ！　くそったれが！」
あんさんは口が悪い、ということがもの凄く印象に残る。まるで琥太が完勝したことを喜べない様子でいるように思えて、あまり私としては快く思えなかった。
決勝は琥太と、元気。
「これで三年連続。マジすげえよなぁ。あの二人って。マジすげぇ」
貫太が興奮気味に身を乗り出して言う。
「幼稚園の頃からあいつら二人は大相撲すんだよなぁ。幼稚園からずっと、だわ。何か持ってるもんでもあんのかねぇ」
延々繰り返されてきた対決を前に、互いの高校の応援も熱を帯びていくのを感じる。
「団体戦じゃあ琥太は元気に一杯食わされたからな」
あんさんが緊張感を持った声で拳を握りしめて言った。私はそんなことは初耳で、貫太の方を見る。
「あぁ、姉ちゃん聞いてないっけ？　琥太兄の高校と元気兄の高校は県大の準決勝で当たってさ、まぁ先鋒次鋒中将と三タテ食らってもう負けは決まってたんだけど、大将戦で琥太兄負けちゃったんだよ。だから琥太兄の高校は全国に行けてない」
貫太が本人たちから聞いたのか、既に持っている情報を話して、そうこうしている内に

二人は仕切り線に向かい合って立つ。ケビンは戻らない。そのまま取組は始まる。
はっきよい！
その声が響くと同時に、一瞬。椿か何かだろうか。赤い花びらが舞ったような気がした。
「……」
何も考えられずに惚けて見ている私の横で、
「うわ……」
という貫太の声がした。
土俵上、琥太の額が割れている。
「……」
私は何も言えず、考えられず、長い息を吐いていた。
琥太の右目にまで流れてきた血のせいで、その目を開けられなくなる。それに乗じて、元気は琥太を一気に攻める。そのまま土俵際まで、一気に追い込まれる。けれど、琥太はじっくりとこらえていた。そのまま、二人は動かない。じり、じりと力の拮抗と、荒れた息づかいが聞こえる。拍手と、歓声。二人や、互いの高校とは無関係の人達まで、
「いけぇ！」「もう一押し！」「こらえろ！」「がんばれぇー！」
力強い声をあげているのがとにかく強く私に迫る。
もうあれから十年以上経っている。福岡で見た、琥太の相撲。あの時も、大人達の声は、喧しかった。いつもそうだ。土俵の周りには、異世界が広がっている。
「あいつら二人は喧嘩四つ。それでまた盛り上がるんだよ」
とあんさんは言い出した。私が目線をあんさんに向けると、あんさんは続ける。
「ざっくり説明すると、右腕を相手の左腕の下に通して組むのが右四つ。反対に左腕を相手の右腕の下に通して組むのが左四つ。右四つは琥太の形で、左四つが元気の形。どっちの組み手が完成するかでこの勝負、決まるぜ。見てな」
そしてすぐに私たちは土俵に目を戻す。すると既に互いのまわしにお互いが手をかけきっていた。琥太の右腕は元気の左腕の、上を通ってまわしへと延びている。……つまり、
「こりゃ元気の形、だわな。まっじぃぞ。これ」
あんさんの呟きが聞こえるのと同時に、喧しかった歓声が、更に一回り大きくなって私の耳に入ってくるようになった。
「元気さんいけー！」
「そのままおしきれー！」
「決めろー！」「決めてください！」
その様々な声の集まりが、私の耳を叩いてくる。私は、まるで自分の手にすがりつくかのように組んでは、もう目を開けていることすらできなくなってしまった。

それから、どれくらいの時間が経ったのだろう。どちらが勝ったも負けたもないまま、気付けばいつの間にか歓声は止み、そして拍手が鳴っている。私はその音の変化に恐る恐る目を開ける。そこに広がっていた光景は、

（何も、変わっていない……？）

土俵際、二人の体勢はあの時と全く、と言って良いほどに動きがなかった。そして、

「もつれたな。これは、あるかもな。水入りも」

あんさんが呟いたその刹那だ。また、歓声が鳴り響く。

元気が琥太にまた圧をかけ、琥太が半歩、後ろに下がってしまう。土俵の向こう側、元気の陣営のイケイケムードと、琥太の陣営の、あーっ、というため息や悲鳴に似た声が混じり合う。そして琥太が後ろに傾くと、元気も体が浮き上がっていくのが私の目に映る。

「これは……！」

というあんさんの声が、建物中の唸り声に似た歓声にかき消される直前に私の耳に届いた。二人は揃って土俵下へと転げ落ちる。私の目には全く同時に地面についたように見えた。私にはこの勝負の結果がどうなったのか全くわからなくて、妙な鼓動だけを強く感じるばかりで気持ち悪かった。

審判の腕は、琥太の方に上がった。でもそれを受けて会場中が、拍手と歓声と、そして主に元気側の方からはブーイングの怒声が響く中、別の審判らしい人や教員だろうか。沢山の男の人が土俵上に上がる。

「物言いでしょこれ」

という貫太の言葉に、

「まぁ妥当だろありゃ」

とあんさんが言った。

「あんな強引に引き抜いた櫓投げじゃ勝てんよ。つか俺から見れば元気の勝ちに見えたし」

あんさんはやっぱり辛口に続ける。

『琥太は怪我をしているのに』

私が貫太に対して手話を使って話すと、

「あんだって？　オイ、ねぇちゃんはなんつってんだ？　貫太」

あんさんの方が強く反応した。

「え。あぁうん。琥太兄怪我してるのにって」

貫太があんさんに通訳をする。

「ふん。怪我もクソもあっかよ。関係ねぇ。相撲に引き分けなんざねーんだよ。どうせ止血の小休止したら取り直しだよ取り直し。このままケリつくまで何度だってやるのが相撲ってもんだ」

腕組みをしてやや吐き捨てるみたいにあんさんは私に言った。
「……」
私は無言だった。何も返さなかった。……嘘だ。返せなかった。何を言えばいいのか、皆目見当なんてつきやしない。
――只今の取組の結果について説明致します
土俵中央。何かのお偉いさんのような風体の男がマイク片手に話し出す。
「瀧中選手に軍配上がりましたが、ビデオ判定の結果、瀧中選手の胴体と菊神選手の左足の着地が同時であると判断し――」
ここで館内から拍手と指笛とが大合奏を始めていた。結論を最後まで聞かないのがデフォルトという環境に私は少し戸惑いを覚えつつ、続きに耳を集中させる。
「瀧中選手の止血の為に二分間インターバルを置いた後、取り直しと致します」
再び館内が、叫び出す。
琥太はすぐに例の付き人が用意したイスに座り、そこでテキパキと応急処置の指示出しをしている。その動きに淀みはなく、オニ崎先生との会話もしっかりとこなしている。
「ま、だろうな。そうじゃなきゃ逆に納得いかねぇよ」
あんさんは特別何もリアクションをする必要もない、といった感じで言葉を発しているが、その言葉は私の背後を流れていく。
私は、自分の額に貼られた止血用テープを押さえながら付き人に汗を拭いてもらい、そしてそんな中であの目、あの瞳と共にまた集中を高めている様子のあいつにばかり気持ちが向かっていた。
何か、を伝えたい。そんな風に思っていた。怪我を押してでも闘いの場へ向かうあいつの傍に駆けつけて寄り添いたい、いやそれが無理でも、何か、何でも良いから。伝えたい。
あの時言えなかった「行ってらっしゃい」でも、あの時弱々しくしか言えなかった「優勝して」でも、その言い直しであっても構わない。
この喧噪の中、私が叫べたら、良かったのに。この階段を駆け下りて、あいつに喋りかけることができれば良かったのに。そう思ってしまった。
もう、何年振りなんだろう。そう思えたのは、何年振りなのか。思い出せないくらい昔なのに、それを一瞬にして、思い起こさせられて。私は琥太の事をばかり見てしまっていた。
急に歓声が沸き起こる。どうやら時間一杯を告げる合図があったらしかった。琥太は深呼吸を一つすると、こちらには目もくれず段を上る。まるで私の事なんてこれっぽっちも気にしていないような態度で、私の感情や鼓動の気持ち悪さなんか、何も知らないまんまで、女人禁制の戦場へと、上っていくのだ。

「まるで琥太ともう会えないんじゃないか～、みたいな必死の表情してるんだけど大丈夫か？　別に琥太は死にゃしねぇから安心しなよ？　な」
あんさんは半分茶化すように、もう半分は本気で私に対して声をかけてきた。何時の間に私の顔を覗き見れる程近い位置に来ていたのだろう。油断ならないなれなれしさだと思う。そのまま私は右手を顔の前で払うポーズをする。ないわー、くらいの意味合いだ。理解できなかったのか、あんさんはきょとんとしていた。でも、特に貫太を使って解説するようなこともしなかった。
「やっぱり柚眞ちゃんも女やね。あの顔は惚れた男に対してするもんばい。琥太も隅に置けん男になったばいな～」
そんな風にニヤニヤ下品に笑いながら言うあんさんを私は軽く睨みつけて黙らせておく。別に私は、そんなに琥太のことを心配している訳ではない。そうだ。私は、目を開けることができなくなるほどの出血をしておきながら闘うことをやめないでいる琥太達の精神が理解できないで、引いているだけだ。そうに決まっている。自分に、言い聞かせた。
「決勝の、取り直し。……だよな？　今の仕切りは」
そんな風に言って私たちが座っているスペースに上がり込んでくるのは、泣きはらした目をしたケビンだった。私は、
「……」
何も言えずにケビンのスペースを空けるのとあんさんとの距離を離すために立ち上がっていた。まさか顔が赤くなっていたりすることはないだろうけれど、ケビンはやっぱりそういう男だから、何も態度に示すようなことはしなかった。ひっくり返せばつまり結論が私には伝わらないということではあるが、話題の中心もケビンが戻ってきたことで、
「おかえり。よく泣けたかい？　泣き虫ケビたん」
「うるせぇわオッサン」
「お疲れさまでした。ケビン兄さん」
「おう。あんがと。どこぞのオッサンと比べて貫太はやっぱ人間としての出来が違うな」
というやり取りと小突き合いに移っていた。
「状況は館内放送とかで大体わかってるけど、まさか取り直しとはな。やっぱりあの二人はやるな」
というケビンの呟きと同時に、
――はっきよい！
また審判の両腕が引っ張られ、勢いよく琥太と元気が巨大な鉄砲玉のように飛び出していく。そして二人はまたしても額から激しくぶつかり合い鈍い音が響く。そしてそれと同時にまた歓声とも悲鳴ともつかない声が聞こえる。琥太の額から、また血が滴る。

「すげぇぶちかまし」
と貫太が思ったことをそのまま呟き、
「バカだ」「バカだな」
ケビンとあんさんが土俵上を眺めて呟いて、私が紅葉を作りにいく。思わず手が出てしまう感じで、私は二人をどついていた。
「痛え！　なんだよ柚眞！」「俺まで叩かれんのかよ柚眞ちゃん！　俺ら褒めてんのに！」
そんなの知るか、という感じで振る舞いつつも、私も一体全体何故に手が出たのか、自分でも理解できなかった。二人は目を見合わせて、そして二人揃って私の顔をのぞき込んで来る。
私は二人の顔を押し退けるようにして土俵上の取組を見ようとする。琥太と元気は、さっきの再現でもするかのようにがっちりと組み合い、微動だにしない状態になっていた。弛緩などない、力と力のぶつかり合った結果の均衡と緊張が、数段離れた距離にいるのに伝わってくる。私はいつの間にか両の手を組んでいて、そしてその手に、無意識に力がこもっていく。
「……」
長い緊張、そして私は息が止まっていることに気付いて咄嗟に深呼吸をする。
いつの間にか私は祈っていた。土俵の上、荒れた息づかいの琥太を見て、どうか無事に帰ってきますように、などと祈っていた。
勝つか負けるかという結果よりもまず先に、ちゃんと帰ってきて、と祈っている私は、もう土俵の様子を見てはいられなかった。私の頭に、午前中の資料動画が流れていて、それがノイズであることに気づいていながら、無視できないでいる。
「そんなに不安かい？　柚眞ちゃんよお」
あんさんが私の様子を見て話しかけてくる。私は今の私自身が確かに浮き足立つ、というか確かに異常な反応をしている自覚もあった。けど、そんな風に指摘を受けて、少しだけ恥ずかしい気持ちもした。あんなにバカにして嫌っていた相撲を見て、こんな風になってしまうなんて。
「あーそうだそうだ思い出した。わかった！」
ケビンはややテンション高めにそういうと、
「柚眞のさっきの顔どっかで見たなって思ったらアレだ。悠さんの剣道の仕合見てる時の嶌さんの顔だ！」
と私に指摘した。あースッキリした。マジ瓜二つだわと満足げに一人ごちるケビンに私は、
『どこがよ。お母さんそんな顔してる？　ていうか私そんな顔してないし』

と素早く手を動かして反論すると、
「そんな顔してるって聞く割にそんな顔してないってのも中々支離滅裂じゃんかよ」
「おぉ。柚眞ちゃん中々に慌てておりますぞ」
二人がまたテンション高く言葉を乗せてくる。貫太は我関せずで熱戦に没頭している。
「いやぁ。あのおばさま若いし何かこうぽやんとしてらっしゃるけど、こうしてみるとなるほど確かに親子なんだなぁ」
しみじみ呟いたあんさんを私は無視して土俵に目線を戻す。
二人の相撲はまだ動きを見せていない。またも左四つという元気の形で、じりじりと押している様子ではあるが、琥太もこらえて反撃の機を窺っている状態だろうか。
「水入りって何分だったっけ？」
貫太が目線を離さないまま尋ねる。
「二分が目安だな。ちなみにそろそろだ」
あんさんが呟いたその瞬間、場内がどよめく。動いたのだ。元気の持ち前のパワーが発揮され、ついに琥太の足が土俵の少しだけ出っ張った部分、
「徳俵かい。マズいね」
そこにかかってしまう。場内の空気は変化する。耳よりも先に肌で感じるその中で、私は立ち上がっていて、
「――――――――――！」
何か呼びかけるような、言葉にもならない何かを、何某かの音にして、そのあまりの不格好さ、おかしさに周囲の目は集まって、私は赤面していた。でもその時琥太の目が、一瞬だけ私に合った気がして。

「僕は負けない、よ」
そう聞こえた気がして。

元気の体が、琥太よりも更に大きな大きな体が、鮮やかに宙を舞った。

何が起こったのかを、場内の誰もが理解できていないようだった。静まりきった館内に、何か厳かな空気が入り込んで、そのまま国技館中を固めてしまったような、そんな気持ちがして。場内には、相撲を取り終えた直後の二人の荒れた呼吸の音だけが、耳に伝わって、刹那。
館内を震わせる大絶叫と拍手の嵐が木霊した。
「……」

ケビンは何も言わずに拍手をしていて、その顔は、幼馴染の健闘を労うというよりも、この拍手を自分が受けられないことの悔しさのようなものを、堪えているような感じだった。

「そこで、呼び戻す、かよ……」

拍手もできない程に放心した様子であんさんは驚きの声を漏らしていた。

「呼び戻すって」

貫太が私の聞きたいことを代わりに質問するとケビンが答えた。

「琥太の伝家の宝刀第二太刀、ってとこかな。呼び戻しっていう技。そういう技があんの。別名は仏壇返しっていうんだけど、そうそう決まらない大技だからあんちゃん興奮してるな」

ケビンがオーバーリアクション気味に感動していたあんさんの態度に苦笑すると、

「そりゃするだろうよ。あれは見事だったろ」

そう言って手を叩きガハハ、と一笑する。

「楽しそう、だね」

四分以上に渡る激闘を終えた琥太がにこやかに私たちの元へ戻ってきて声をかけてくる。その様子はやっぱりいつも通りの琥太で。にこにこと、そしてへらへらがひっついた顔で、よっこいしょ。そう言って腰を下ろす。

「……」

長い息一つ、吐く。

『お疲れさま』

琥太の前に回り込んでから、しゃがんで声をかける。

「うん。……流石に、本当に疲れちゃったよ。あはは」

少しばかり苦しそうに笑いながら琥太は言った。

『それと』

私はここで手話を区切った。琥太も、無言で私のことを見ていた。

『おかえり、なさい』

それを見て琥太は、顔を静かにほころばせて、

「うん。ただいま」

そう返してくれた。私の頭の中に、父と、母のかつてのやり取りが浮かんで、何故だか私はほっとした。

表彰式もつつがなく終了し、琥太、元気、ケビン、健太の四人がそれぞれに表彰を受け、簡単な雑誌の取材などに答え、そろそろ帰ろうか、そんな時だった。すみません、ちょっとよろしいですか？　そんな声をかけてきたのは、夕方のワイドショー番組のリポーター

達だった。
決勝の激戦を映していて、アポも何もない中恐縮であるが取材したい、という申し出に、結構慣れっこな部分があるのだろう。琥太もケビンも短時間でよければ、とすぐに了承した。私たちはその様子をカメラマンの背中越しに見ることになった。
質問は、既に調べがついていたであろう琥太達四人組の関係性から始まり、そして琥太のV十一へと続いていく。
その返答はというと、正直に言うとテレビ用、というか何というか、非常に単純で、ありきたりな回答しか皆しないのが私としても気になっていた。そこについては、やはり慣れっこ、の部分だろうか、と私は思っていた。
でも、テレビ側はそう思わなかったらしく、どうにかその態度を突き崩してやろう、という態度を明らかにさせていった。
質問をする男性の声に聞き覚えがあるな、と思っていると、その声の主は夕方のワイドショーの名物司会者で、関西系の軽妙な話のノリが受けて全国区になった人で私も知っている人物だった。
その人が質問を現地のリポーターから引き継いだ瞬間から、質問の趣が変わったのだ。例えば稽古ばっかりやけど遊びたいとか思わんのん？　とか、そしてその次には、彼女とかおらんの？　という定番のノリ、男子高校生に向けた質問としては、そして視聴者の中高年に対してはお誂え向きなんだろうか。その下卑たノリに私は嫌悪感を覚えたが、
「僕たち皆偶然彼女の名前が同じなんですよ。ケイコ、って言うんですよ」
琥太は軽妙に合わせていた。そしてその次の質問はこう。じゃあケイコちゃんこの番組見てるから、カメラの向こうにいるケイコちゃんにメッセージを三、二、一、キュー！
琥太以外の全員が琥太を睨みつけたのを私は見ていたし、琥太もその質問、というよりも無茶振りに困惑の表情を浮かべていたが、
「僕たち明後日の夕方には帰るからね～！」
と、どうにか体裁を整えた発言をしていた。そこで私の肩をトントン、とあんさんが叩いて、
「一応言っちゃるけどな、あいつが言うケイコってのはな、相撲の『稽古』と『ケイコ』ちゃん、を掛けとるだけだからな。あいつらに彼女とかおらんぞ」
親切に、というかありがた迷惑な解説をしてくれた。それくらいのことは、私もすぐにわかったのだが。恐らくカメラの向こうのアナウンサーは、わからなかったのだろうなと思い、呆れてしまった。
「あぁなるほど！　そういうことか！　ビックリした！　彼女居るんだすげえって思ってた。俺」

貫太のように。というか、貫太のように素直に気付いてくれたりも、こういうタイプのアナウンサーだと、しないのだろうな。何が立派、というのかもよくわからないもんだ、そう思うと益々呆れる。

その後もどうにか琥太はアナウンサーの質問をいなし続け、最後の挨拶まで繋ぎきった。四人揃って頭を下げ、ありがとうございました、と互いに言うと、周囲のスタッフ達が作業を始める。

「おいお前何だよケイコちゃんってよ！　お前バカだろバーカ」

元気が琥太に対して手刀を浴びせながらつっこんでいくと、

「アレくらいのノリでしゃべる方が何かと捗るんだよアーホ。負けた奴は大人しく黙っときゃ事はスムーズってな」

琥太も負けじと言い返す。すると今度はケビンが、

「しかしお前の返しってアレだよな。年寄り臭いって言うか、渋柿じゃねーか。干されきって甘い奴じゃねーぜ？　若いガキが無駄に老練されたこと言うの、逆にダセーしよ」

とコメントすると、

「やーい渋柿野郎ー」

健太も合わせて茶化してくる。

「うっせーわアホんだら。カメラの前でだけ妙に良い子ぶってんじゃねーよ二人とも、いや三人ともな」

「んだとこの出しゃばりが！」

「おうおう負けといて随分調子づいてんじゃんかサンバの一つも踊れねー癖によぉ」

「言いやがったな後で覚えとけよ」

「しっかり覚えといてやるよそのクソつまんねー捨て台詞共々な！」

琥太と元気がそんなやり取りをしている所を、何故かさっきまでとは違う別の小型カメラを使って無言で映し続けている人がいる。私は妙だと思った。

私も昔テレビの取材を受けたことがあるが、確かその時にはあんなことをされた記憶はない。

今四人を映しているカメラは、何のために、何を映しているのだろう。本当にこの取材は、終わっているのか？　スタッフ達を見渡しても、作業に忙しく動き回る者と、様子をじっと見ている者とが混在していて、聞き出すことを私は躊躇してしまった。

「つかお前彼女がケイコってそれ良いのんか？　え。良いのんか？」

ケビンがそんな風に琥太をせっつく。

「良いのんか、って何が？」

琥太が言うとケビンはにやにや笑いだし、

「琥太の本当の彼女の名前を言ってやらんとそこは！　ケイコとか嘘ついたらいかんって」
そう言いつけると、
「いやいやいや！　お前それは今だけは言っちゃならんことだろうがよそれ」
琥太はケビンの頬を鷲掴みにしてガクガクと揺らし始める。
「え？　マジマジ？　琥太彼女できたと？　紹介せんね俺に！」
健太がその輪の中に入り、
「お前に彼女とか信じられん。嘘やろ。今なら傷は浅いぞ？　さぁ言えよ琥太」
元気が今度は琥太の頬を鷲掴みにする。
「うるせーよお前！　僕の彼女はケイコだってさっきから言ってるだろうがよ」
「いやぁ。いかん。そりゃいかんばい琥太。お前そんなだから継続してんだろ」
「お前はもう！　こういう時にまでそういうことを言う！」
「渋柿みたいなことばっか言うからだろ。点数稼ぎみたいなコメントばっかりしやがってよぉ。あーあ。こんなんじゃ春とかマジ遠いし。あー鼻白む鼻白むー」
ケビンの言葉と元気、健太の絡みを前に琥太も我慢の限界を迎えたか、
「そんなに言うなら、ケビンはケビンでエナ問題は解決した？　健太も人の色恋話が羨ましいならもっとケイコちゃんにのめり込まなきゃでしょ」
そんな風に笑顔で、でも目が笑っていないのが露骨にわかる顔をして言った。健太は言っている意味がよくわからなかったのであろう。ぽかんとした顔をしていた。問題はケビンの方で、それなりにカチンと来た顔をしているのが伝わってくる。俗に言う売り言葉に買い言葉というものだったのだろうが、エナ問題、というのが地雷だったことは何となく察しがつく。
「へぇ。そういうこと言う。お前そういうこと言うんだ。へぇ。お前最低だなぁ。え？」
ケビンが琥太のまわしを殴りながら言うと、
「あぁ。先に言ったのはお前だからな。覚悟くらいできてたよな？　勿論。え？」
琥太はケビンの髪を掴み、互いに笑顔ではありながら、その実完全なにらみ合いを始めていた。私はそれが一種のじゃれ合いなのをわかっている。小学生の頃から、ずっと見てきた間柄だ。多少乱暴に見えてもお互いのことをわかっている。幼稚園児の頃から皆を見ていたあんさんも、貫太だってわかるだろう。知っている人ならわかること。でも、わからない人の方がずっと多い。
「おっと。やっと高校生らしくなったやん」
どこから鳴っているのかはわからないが、スタジオの中から喋っているであろう私のいけ好かない風の軽い声が楽しそうに言う。
「でも流石にカメラの前で喧嘩なんかおっ始められたらまずいからそこは止めさせてもら

いま〜す」
知らない人、わからない人から見ればあれは喧嘩に見える。あのガタイだ。荒々しく見えるのは、言うまでもなかった。
二人だけではない、四人ともが、今すぐにでも卒倒しそうな顔をしているのが見て取れた。サァ、っと血の気の引いた顔をして、顔に緊張からか震えが起こっている。でも、四人とも瞬間に何が起こったか、どうなってしまっているのか、何をされたのかを、全て悟ったのだろう。体は直立不動で、背筋が伸びきっていた。
「ふぃ〜。スッキリしたぜぇ〜い……って、何だ？　どした？　え？」
いつの間にか消えていたあんさんが戻ってきて事の次第を掴みかねていると、四人ともまた並び直す。
「お見苦しいところをお見せしました。すみませんでした！」
口火を切ったのはやっぱり琥太だった。四人が揃って頭を下げた。
それは、多分でしかないが、精一杯の行いだ。それを、
「何やねん四人揃って渋柿なんやないかい！　ぶっひゃひゃ！」
大人達は、――スタジオから漏れる声も、ここにいる連中も――一笑に付して終わりにした。
そして当然だが、それで終わりにしない連中も、いる。

「明後日のつもりだったんだけど、さ」
琥太が少しだけ苦しげな、にこにことへらへらを同居させて、頭をぽりぽりやりながら私に言ったのは夕食を食べ終わった後のことで、
「親方から呼び出し、食らっちまった」
さっきの琥太の言葉をケビンが引き継いだ。
「本当は今日トンボ帰りかなって思ったけど」
琥太がそう言った後、
「何か明日の午後が良いって言っててさ、親方」
またケビンが引き継いで言った。
二人は貫太が後ろでこっそりと話を聞いている中、荷造りをしようとして、既にまとまっている鞄を手持ち無沙汰にいじりながら私に今後のことを説明していた。
「お二人ともお疲れでしょう。明日くらいはゆっくりできるように、荷物はこちらでまとめておきましたから。間違いがないかどうかだけ、確かめておいてください」
母が父の指示でやったことだろうか。それとも、自分でやったのか。
昔の、大時代的な、とでも言えばいいだろうか。両親の様子はまるで時代劇を見ている

みたいで、それは全盲の父と、同じく昔気質な母が揃いも揃って動きやすいからという理由で普段着にしている和服も問題なのだが、それ以上に、母は父の二歩後ろを常に歩くのだ。物理的にではない。目が見えない父のために、実際は横や斜め前を歩いている。……これは、精神的な話だ。精神的に母はいつだって父に凌駕されていると思っていた。別に暴力や暴言の類があるというのではない。母は、いつだって自分のために動かない。父の言うことに、何でも、はい。はい。と言って生きているように私には見えている。

「嶌さんは、本当によく見えているよね」

琥太が鞄から手を離し、私の方を見て呟いた。

「嶌さんの目が、よく見えているから、この家はうまく回っているんだろうなって、今ふっと思った」

私は無言で、琥太は言葉を続ける。

「僕らの荷物を何の間違いもなくまとめきってたよ。下着の類まで入れ違いも何もなく。どんだけ見てたんだろう。下着までだよ？　あははっ」

「なぁ。どんだけ俺らのこと、見てたんだって話だよ。なぁ」

ケビンも同調して、その様子は微笑ましいくらいまであって。私はこの二人が国技館の土俵の上で見せていたあの気を、怖さを、本当に今日見ていたものだということが信じられない気持ちで一杯になっていた。それくらいに二人は穏やかだった。

私は、何も言えなかった。大事なことを、何も伝えられないのが、私だと思って、それはとても似つかわしいと、声も出せず自嘲した。

「姉ちゃん。大変だよ。これ」

次の日の午後、琥太達が帰ってそろそろ二人の乗り込んだ新幹線が博多に着くだろうその時に貫太が見せたTwitterの画面を見ると、

「……」

そこに写るのは親方に殴り飛ばされている琥太の写真で、『あり得ない。車内でいきなり殴りつけてた。マジあり得なくね？』という発言と共に貼られたその画像は、貫太が見せた時点の数字でも何十万というリツイート数だった。

あの渋柿騒動は、確かに、明確に、騒動だと今更ながら感じた。琥太を殴った祖父、親方は個人ではTwitterをしていないが、部屋が公式アカウントを持っている。あの番組を放送するテレビ局は、誰がどう見ても騙し討ちと感じるであろう取材体制を非難された。あの私の好かないアナウンサーも、その言動を非難され、どうでも良いことに不倫がバレた。詰まるところ、その全てが炎上した。テレビのワイドショーが、またそれに拍車をかけていく。貫太が呟いた。Twitterにではなく、物理的に私の目の前で。

「琥太兄達は後援会の人達に毎日頭下げ続けてるんだってさ。やっぱり琥太兄達の態度を

責める人達も後援会に多いって言うし、……でもあれさ、やっぱ俺おかしいと思う。あんなの、卑怯だろ」

貫太が言う言葉はもっともで、私もあれはないと思う。取材体制もそうだし、何よりも最後に大笑いしてあげつらった事が。

そして当然、琥太達の態度が責めに値する大問題であったことも理解している。彼らが暮らすのは品格や品性を特に問われる世界なのだから。私はいつの間にか禁止令を破ってピアノの鍵盤を打つ。ほんの数日程度しか禁止令を守った日はなかったのに、何ヶ月か、いや何年か振りに鍵盤に触れたような心持ちがする。『ただいま』心の中で呟いてみる。私の心は晴れることはない。ただ、何か、をしたいと思った。母のような広い目も、父のような深い目も持てず、貫太のようにその心を寄せて憤慨することもできないけれど、私も何かを、と思った。

後ろ手にピアノの蓋をゆっくりと閉め、反対の手で携帯をいじる。その液晶にはもしものために、と登録してある瀧中琥太の名前が映っていて、そしてその三つ下。孫を殴った張本人、瀧中勇邁。親方の名前がある。

私は一つ長めに息を吐き目を軽く瞑る。そして一つ小さな決心をしてその名前に指を触れた。

――連載第四回(最終回)『美しい月のノクターン』へ続く